

## 短期海外研修での All in English の授業が 学生の情意的側面に与える影響

田 辺 尚 子

How Classes Conducted All in English on a Study Abroad Program  
Affect Students' Impressions

Naoko TANABE

はじめに

本稿では、短期海外研修において All in English の授業が学生にどのような点で肯定的または否定的に受け入れられているのかについて調査するとともに、その評価が学生の英語力によって変わるのかどうかを明らかにする。また、研修の前後での情意的側面の変化についても明らかにする。

日本では、中学、高校、大学を通して All in English の授業を生徒や学生が受ける機会はあまりない。たとえば、文部科学省（2011）によると、高等学校の選択必修科目である「オーラル・コミュニケーションⅠ」と「英語Ⅰ」において、ほとんど英語で授業を行っている教師は前者では19.6%、後者では2.3%と極めて少ない。また、田辺（2011）は主に広島県の教師を対象に調査を行った結果、担当する全科目を総合してほとんど英語で行っている教師は2.5%であったと報告している。

したがって、学生が All in English の授業を集中して継続的に受ける機会としては、短期海外研修が初めてであることが多い。もちろん、大学における英語の授業でネイティブ教師による All in English の授業を受けることも考えられるが、短期海外研修のように1日何時間も集中的かつ継続的に All in English の授業を受けるという経験は極めて特殊な経験であり、その経験が学生の情意的側面に与える影響について調査することは意義があると考えられる。

短期海外研修の第二言語習得への効果については、欧米の多くの研究を収録した Collentine and Freed（2004）の編著において、語彙や文法の発達においては海外研修が自国での学習よりも効果があるとは言えないが、コミュニケーションに関連した要素については効果が高いと報告している。日本の研究では、木村（2006）や千葉（2008）を初めとしてリスニング力の伸長が数多く報告されており、木村（2007）では英語学習ストラテジーの使用度が有意に高くなったことを、千葉（2008）はコミュニケーション積極性と英語学習意欲の得点が有意に上昇したことを報告している。また、Yashima（2002）は英語で自発的にコミュニケーションを図る意思（willingness to communicate in L2: これ以後 WTC）は、英語使用不安が低いほど高くなるという調査結果を報告している。これらの研究のほとんどはホームステイ体験と教育機関での授業という形態の短期海外研修を扱ったものであり、本調査も同様であるが、本調査では現地の大学での All in

English の授業に焦点を当てて調査した点に特徴がある。

## I. 研究の目的

本研究は、短期海外研修での All in English の授業が学生の情意的側面に与える影響について調査することを目的とし、次の3つのリサーチ・クエスチョンを設定した。

- ① 短期海外研修での All in English の授業に対しての学生の肯定的評価と否定的評価にはどのようなものがあるか。
- ② 短期海外研修での All in English の授業に対しての学生の肯定的または否定的評価が、学生の英語力で変わるのかどうか。
- ③ 短期海外研修での All in English の授業を受ける前後で学生の情意的側面にどのような変化があったか。

## II. 研究方法

### 1. 対象者と短期海外研修の概要

対象者は、安田女子大学現代ビジネス学科2年生40名である。海外研修の参加は任意であり、80%の学生が海外経験は初めてであるが、90%の学生が大学でネイティブ教師による All in English の授業を受けた経験がある。また、英語力は英検3級～2級程度である。

本研究における短期海外研修とは、現代ビジネス学科主催の2009年度海外語学ビジネス研修を指し、2010年2～3月にオーストラリアにホームステイしながら6週間に渡って南クイーンズランド大学 (University of Southern Queensland) で授業を受けるというものである。授業は Business English, Writing English, Public Speaking の3科目をそれぞれ1名の教師が担当し、13～14名の少人数クラスで1日5時間、週5日行われた。ただし、毎週半日程度のフィールド・トリップがあり、そのための事前授業が半日程度行われた。3人の教師に対する学生の評価は、3人とも5件法で4.8～4.9と極めて高かった。

### 2. 調査方法

情意的側面の調査としては、海外研修の事前・事後に質問紙調査(4件法)を実施した。

英語力の調査としては、海外研修の事前・事後に TOEIC の Practice Test (事前・事後で異なるもの)を実施した。

### 3. 分析方法

リサーチ・クエスチョンの①、③については4件法による度数分布と平均値をもとに分析した。②については TOEIC の素点と質問紙調査の肯定的評価、および否定的評価のそれぞれの得点平均との単純相関を出した。また、③については、All in English の授業を受ける前の値の平均と、受けた後の値の平均とを  $t$  検定で分析した。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 短期海外研修での All in English の授業に対する学生の肯定的評価と否定的評価

##### 1.1 肯定的評価

教師に対する学生の評価が極めて高かったことを反映して、ほぼ全員が総合的に All in English の授業に非常に満足しており、全般的に高い数値結果を得た（表1）。

All in English の授業について具体的にどのような能力が向上したかについては、項目3（総合的）、3-1（リスニング力）、3-2（スピーキング力）、3-7（コミュニケーション・ストラテジー）については80%以上の学生が肯定的評価をしている。一方で、その他の3-3（リーディング力）、3-4（ライティング力）、3-5（語彙力）、3-6（文法力）など文字系技能や文法についての項目は、30%以上が否定的評価をしている。特に文法力の伸びについては約半数の学生が否定的評価をしている。海外研修における授業では日本とは異なり音声面に焦点が当たることや、日常生活においても音声面に携わる機会が多いのでこの結果は納得がいくものであり、Collentine

表1 All in English の授業に対する肯定的評価

アンケート項目		1	2	3	4	平均
1	総合的に All in English の授業はよかったと思う。	0	0	1	39	4.0
2	All in English の授業は最初はつらかったが、ある時期以降はよいと思えるようになった。	0	3	10	27	3.6
3	英語力が総合的に伸びたと思う。	0	4	20	16	3.3
3-1	リスニング力が伸びたと思う。	0	2	20	18	3.4
3-2	スピーキング力が伸びたと思う。	0	7	27	6	3.0
3-3	リーディング力が伸びたと思う。	0	16	18	6	2.8
3-4	ライティング力が伸びたと思う。	1	12	18	9	2.9
3-5	語彙力が伸びたと思う。	0	11	23	6	2.9
3-6	文法力が伸びたと思う。	0	19	17	4	2.6
3-7	聞き返したり頼んだりしてコミュニケーションを継続しようとする力が伸びたと思う。	0	2	14	24	3.6
4	英語の授業は All in English が自分の英語力の伸びには一番効果的だと思う。	0	0	15	25	3.6
5	前よりも英語が好きになった。	0	0	6	34	3.9
6	英語に対する自信がついた。	0	11	28	1	2.8
7	英語が完全にはわからなくても何とかやっていると認めるようになった。	0	0	10	30	3.8
8	英語をもっと使いたいという思いが強くなった。	0	0	10	30	3.8
9	帰国後も All in English の授業を受けたい。	1	3	16	21	3.5
10	帰国後に英語を勉強する意欲が増した。	0	0	10	30	3.8
11	帰国後も英語を話したり聞いたりする活動に積極的に参加したい。	0	2	11	27	3.6

1：全くあてはまらない 2：あまりあてはまらない 3：ややあてはまる 4：とてもあてはまる

and Freed (2004) の報告を追認した結果となった。

また、項目 7, 8, 10 は同じ高い数値となっているが、Yashima (2002) の報告と同様に、英語使用不安が低い (項目 7) ほど WTC (項目 8) が高くなるという結果となり、同時に学習意欲 (項目 10) も向上させる効果があることがわかる。

## 1.2 否定的評価

肯定的評価が高かったことを反映して、全般的に否定的評価は低かったが (表 2)、項目の 3 と 7 については 70% 以上の学生があてはまると回答している。3 の「言いたいことが英語でいえないのがつらかった」はスピーキング力に原因があるが、日本での講義式の授業とは異なり、海外研修では学生の発言が求められる授業形態のためつらく感じたものと思われる。また、7 の「集中力が持続せず疲れてしまう」は All in English の授業に慣れていないことと学生の総合的な英語力がそれ程高くないことが原因だと考えられる。

表 2 All in English の授業に対する否定的評価

アンケート項目		1	2	3	4	平均
1	総合的に All in English の授業はつらかった。	1	4	24	11	3.1
2	リスニングしてもわからないまま授業が進んでいくのがつらかった。	3	13	16	8	2.7
3	発言や指名されたときに言いたいことが英語で言えないのがつらかった。	13	16	6	5	2.1
4	他の友達は授業についていっているようなのに、自分についていけないようであつらかった。	2	14	17	7	2.7
5	英語力があれば All in English の授業もいいと思うが、今はそう思わない。	2	5	20	13	3.1
6	英語力があっても、日本語交じりの授業の方がいいと思う。	4	11	13	12	2.8
7	All in English の授業は集中力の持続が必要だが、持続が難しいので、疲れてしまう。	7	25	5	3	2.1
8	All in English の授業は、「内容的に重要、重要でない」の区別が難しいので学習内容の記憶に負担がある。	2	15	19	4	2.6

1 : ととてもあてはまる 2 : ややあてはまる 3 : あまりあてはまらない 4 : 全くあてはまらない

## 2. 短期海外研修での All in English の授業に対する学生の評価と英語力の関係

TOEIC Practice Test の素点と質問紙調査の肯定的評価、および否定的評価のそれぞれの得点平均との単純相関を出した結果、有意差は認められなかった。これは、教師に対する学生の評価が 5 件法で 4.8~4.9 と極めて高かったことを考慮すると、学生の英語力の高低よりも教師の授業力の方が All in English の授業の評価に大きく影響するということを示唆していると考えられる。

## 3. 短期海外研修での All in English の授業を受ける前後における学生の情意面の変化

表 3 と図 1 に見られるように、短期海外研修の前後で学生の情意的側面において大きな変化が認められた。表 4 は、短期海外研修での All in English の授業を受ける前の値の平均と受けた後の値の平均とを  $t$  検定で分析した結果を表しており、1~8 の項目について有意差が認められた。日本での授業を想定して回答を求めた項目 9, 10, 11 については有意差は認められなかった。

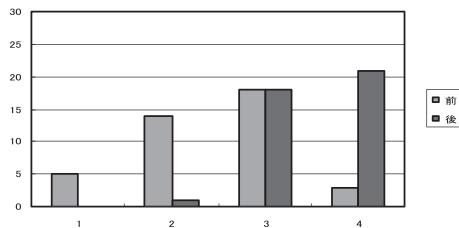
有意差の値の大きさを示す  $t$  値から解釈すると、特に項目 4, 5, 7 が研修前後の値の変化が大きいことが明らかになった。英語だけの音声的環境の中における抵抗感について、研修前後で

非常に大きな変化が起こったことがよくわかる。海外研修の成果として一般的にリスニング力の伸長が認められているが、情意的側面での抵抗感がなくなることが大きく寄与していることが示唆される。

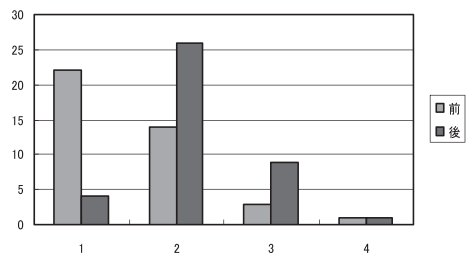
表3 All in English の授業を受ける前後の情意的側面の変化

アンケート項目		前後	1	2	3	4	平均
1	英語が好きである。	前	5	14	18	3	2.5
		後	0	1	18	21	3.5
2	英語が得意である。	前	22	14	3	1	1.6
		後	4	26	9	1	2.2
3	外国人と英語で話すことに抵抗がない。	前	16	16	5	3	1.9
		後	0	10	19	11	3.0
4	英語だけの映画やテレビ番組を見聞きしても抵抗がない。	前	20	15	4	3	1.8
		後	0	3	22	15	3.3
5	英語だけのニュースやアナウンスを聞いても抵抗がない。	前	28	8	3	1	1.4
		後	2	8	20	10	3.0
6	英語だけの本や記事を読んでも抵抗がない。	前	28	10	2	0	1.4
		後	4	15	19	2	2.5
7	英語で何とかやっていけると思う。	前	24	11	3	2	1.6
		後	2	5	21	12	3.1
8	英語力をつけるためには、海外でネイティブの先生による All in English の授業を受けることが一番よいと思う。	前	2	10	18	10	2.9
		後	0	4	9	27	3.6
9	英語力をつけるためには、日本でネイティブの先生による All in English の授業を受けることでも十分可能である。	前	3	11	20	6	2.7
		後	1	9	18	12	3.0
10	英語力をつけるためには、日本で日本人の先生による All in English の授業を受けることでも十分可能である。	前	6	14	14	6	2.5
		後	5	20	8	7	2.4
11	英語力をつけるためには、日本で日本人の先生による日本語交じりの授業を受けることでも十分可能である。	前	7	15	11	7	2.5
		後	8	18	6	8	2.4

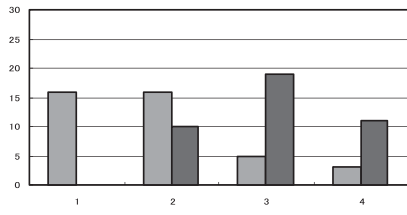
1：全くあてはまらない 2：あまりあてはまらない 3：ややあてはまる 4：とてもあてはまる



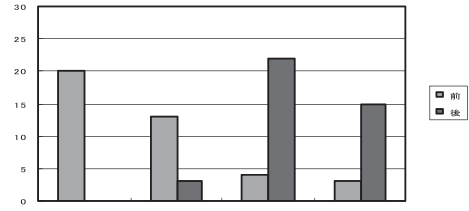
1 英語が好きである



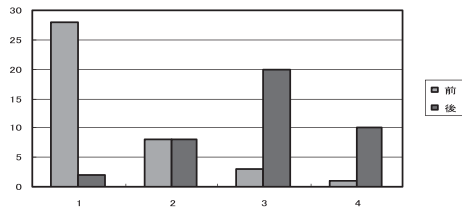
2 英語が得意である



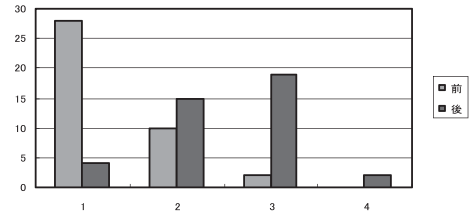
3 外国人と英語で話すことに抵抗がない



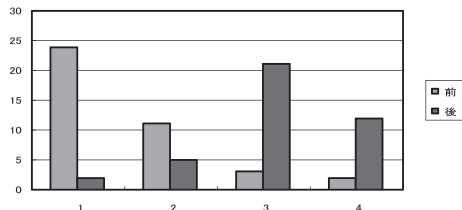
4 英語だけの映画やテレビ番組を見聞きしても抵抗がない



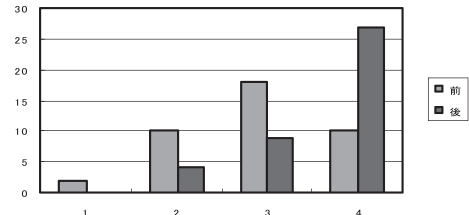
5 英語だけのニュースやアナウンスを聞いても抵抗がない



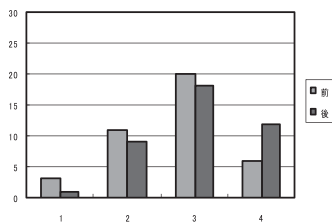
6 英語だけの本や記事を読んでも抵抗がない



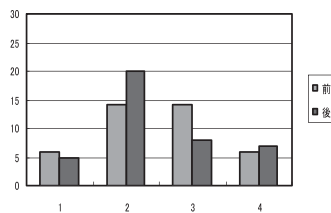
7 英語で何とかやっていけると思う



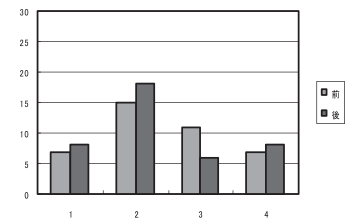
8 海外でネイティブの先生による All in English の授業を受けることが一番よいと思う



9 日本でネイティブの先生による All in English の授業でも可能



10 日本で日本人の先生による All in English の授業でも可能



11 日本で日本人の先生による日本語交じりの授業でも可能

図1 All in English の授業を受ける前後の情動的側面の変化

表4 All in English の授業を受ける前後の情意的側面の変化の検定結果

アンケート 項目	海外研修前		海外研修後		t 値と 有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1	2.48	0.82	3.5	0.56	6.42 **
2	1.58	0.75	2.18	0.64	3.82 **
3	1.88	0.91	3.03	0.73	6.15 **
4	1.75	0.93	3.25	0.71	8.02 **
5	1.43	0.75	2.95	0.82	8.54 **
6	1.35	0.58	2.48	0.75	7.43 **
7	1.58	0.84	3.08	0.80	8.06 **
8	2.9	0.84	3.55	0.68	3.76 **
9	2.73	0.82	3.03	0.80	1.64 n.s.
10	2.5	0.93	2.43	0.93	0.35 n.s.
11	2.45	0.99	2.35	1.03	0.43 n.s.

\*\* $p < .01$ 

## ま と め

本研究は対象者が40名で、対象者の英語力も英検3級～2級レベルと限定されているため一般化することはできないが、短期海外研修はどの高等教育機関でも実施されているほど一般化し、学生が All in English の授業を受ける最初の機会となる可能性が極めて高いという日本の英語教育の現状を鑑み、次の2点をまとめとして示唆する。

まず、短期海外研修での All in English の授業が学生の情意的側面に与える影響としては、リスニング力などの音声的技能、コミュニケーション・ストラテジー、WTC、学習意欲の向上と英語使用不安の低下が学生によって認識されることが確認され、英語がより好きになり、日本ではあまり行われていない All in English の授業に対しても肯定的な評価につながっていくことがわかった。そして、その肯定的な評価は学生の英語力とは関係なく、むしろ担当教師についての評価が高かったことが大きく関係していることが示唆された。したがって、短期海外研修で大きな成果を得るためには、授業担当教師の人選が非常に重要であると言える。

2点目として、Ellis (1994) が正式な授業は外国語熟達の手助けとして大変有効であるが、特にそれが外国語に自然に触れられる機会と結び付けられたときには有効であると述べているように、海外研修における学校での授業は日常生活との結び付きが可能であり、特に授業でフィールド・トリップについての説明を聞いてから実際に出かけたり、ホームステイ先で英語を使う宿題を授業で出したりなどの実践に即した授業形態が All in English の授業の評価をより高めたと考えられる。その意味では、海外研修での英語学習は学生が最も効果を感じる可能性が高い学習形態であり、教師の人選とともに授業内容も海外研修ならではの工夫を凝らすことが重要である。

## 参 考 文 献

- Collentine, J. & Freed, B. F. (2004). Learning context and its effects on second language acquisition: Introduction *Studies in Second Language Acquisition*, 26, 153-171.
- Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *Modern Language Journal*, 86, 54-66.
- 木村啓子. (2006). 「英語圏滞在が学生の英語力に及ぼす影響—短期語学研修により英語力は向上するか—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』, 12, 1-20.
- 木村啓子. (2007). 「英語圏滞在が英語学習戦略に及ぼす影響—短期海外研修は英語学習戦略を向上させるか—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』, 13, 1-12.
- 田辺尚子. (2011). 「高校教師の教室での英語使用に関する意識調査—新学習指導要領の公示を受けて—」『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』, 8, 27-39.
- 千葉克裕. (2008). 「短期留学がリスニング力と学習意識へ与える影響」『東北英語教育学会研究紀要』, 28, 27-36.
- 文部科学省. (2011). 「授業における英語使用状況と共有化の取組の有無」『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm) (2011年7月20日検索)

〔2011. 9. 29 受理〕